



公益社団法人
北海道森と緑の会
理事長
堀 達也

東京オリンピックゆかりの 樹木展示林

1964年に開催された東京オリンピックの際、各国の選手の方々に、それぞれの国の代表的な樹木の種子を持参してもらったそうです。協力してくれたのは44カ国。272種類の樹木の種子が集まりました。もちろん、わが国からも各国の選手団にトドマツなど日本の種子を贈呈し、関わった国は93カ国。このうち、北方系の樹木の種子は農林水産省北海道林木育種場と北海道立林業試験場で苗木に育てられ、全道各地に植樹されました。

遠軽町の社会福祉法人北海道家庭学校には、昭和43年、10種類の苗木が届けられました。家庭学校の皆さん、遠軽町の皆さんのご尽力により、現在も「樹木展示林」として150本ほどの樹木が残っており、平均胸高直径34センチメートル、平均樹高24メートルに育っています。遠軽町では、オホーツク総合振興局

や森林管理局の協力を得ながら、これらの樹木を加工し、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでうまく活用できないか、現在検討をすすめています。

「植える↓育てる↓伐る↓植える」という森の循環ということがあります。植えた木を上手に使い、一方では森を若返らせていくことは、大切な森を次の世代に引き継いでいくうえで極めて重要なことです。オリンピックゆかりの樹木も、上手に活用されていくことを期待しています。北海道森と緑の会もこのお手伝いをしていきます。

緑の羽根募金が始まって70年ほど。私たちがたくさんのお木を森に植えてきましたが、それらの樹木も活用の時期になっています。大切な森を次の世代に引き継げるよう、今年も皆さんとともに取り組みを進めていきます。



2016年度ミス日本みどりの女神
飯塚 帆南氏

「みどりの女神」として感じたこと

私は一年間のみどりの女神の活動を通じて企業やNPO、一般市民や子供達の草の根活動が如何に大切かを学びました。政府や行政は政策や法案を通じて非常に重要な役割を果たしているのですが、そこで掲げられる理念や目的を、実現まで持つていくためには、個人個人の力が不可欠なのだと感じています。

緑の募金活動では、たくさんの方々の力をお借りしました。昨年、緑の募金の一部は、熊本地震の復興支援にも充てられて、これによって被災地での森林整備や緑化支援が可能となり、雇用も創出され、社会貢献に活かされました。その他にも、ふるさとの森林をよみがえさせたり、海外の荒廃してしまった山々を再生したりと、一人一人の積み重ねのおかげで、より持続的な世界を実現するのに近づけると考えております。

緑の少年団のパワーには圧倒さ

れました。子供達ならではの感性や物事の感じ方から気付かされることが多くありました。「任んである地域の自然を守っていきたい」という純粋な思いは胸に刺さるものがあり、改めて、次世代のために、未来のために、一人一人が今できることをやらないといけないんだと強く感じました。

本年度は「国連持続可能な観光開発年」でもあり、2020年には東京オリンピック・パラリンピックを控えていて、インバウンドが日に増加していますよね。そんな中、最近日本の美しい自然を目当てに観光にいらっしゃる外国人も多いとのことでした。

海外の方々に日本の自然の魅力、木材の魅力を知って頂くために、皆さんの力が必要です。是非この年を機に、みんなで力を合わせて、日本のみどりの素晴らしさを世界に広げていきましょう！